

Title	明治大正期古今集注釈書・研究書略解
Sub Title	A study of annotated Books for Kokinshu in the Meiji and Taisho era
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2007
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.42 (2007.) ,p.91- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	関場武文庫長退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20070000-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治大正期古今集注釈書・研究書略解

川上 新一郎

凡 例

- 一、本稿は明治大正期の古今集注釈書を中心に、書目、評論など古今集に関わる単行書の略解を試みたものである。
- 一、最初に書名、編著者、刊行年月、発行地・発行者、装丁・冊数を掲げた。装丁については、線装袋綴は袋綴とし、線装画面印刷は和と表示し、大きさは大、半、中などとした。洋装本は特に表示せず、大きさは菊判、四六判などとした。
- 一、出来うる限りは初版初印本によることとしたが、管見に入らず、再版などによった場合もあり、その際は注記した。また、奥付に再版などと表記されている場合、組み直しか、紙型による同版かを、明示するよう努めた。
- 一、奥付等においては改行を示すため「ノ」を用いた。
- 一、奥付はそのまま記載したが、住所は私家版を除いて省略した場合が多い。
- 一、所見本に欠損があり、奥付などに不明箇所を生じている場合はその旨注記した。
- 一、編著者については、人名事典などにより、特別な調査はしていない。また、人名事典の引用に際しては、表記等は基本的にそれに拠ったが、記述を適宜省略しているので、注意されたい。
- 一、所見本は国立国会図書館本によった場合が多く、慶應義塾

大学本、その他の大学図書館本、公立図書館本、個人蔵のものも参考にした。

主要参考文献

小泉菱三『明治大正短歌大年表』（昭和17刊、立命館出版部）
西下経一編「古今集」研究書誌（西下経一・実方清編『古今集 新古今集』 国語国文学研究史大成 所収、昭和35刊、三省堂）

国立国会図書館近代デジタルライブラリー

1、先入鈔 渡忠秋 明治十四年一月 京 細辻昌雄刊 袋綴 六一冊

外題「先入抄」。見返し「渡忠秋先生纂述／先入鈔／楊園蔵」
〔「楊園」は忠秋の号〕。巻頭に三條実美の題字「陽春」「白雪」
（二丁）があり、「太政大臣三條実美書」と署名。ついで「先入抄序」として明治十三年七月十一日従五位高崎正風の序文（三丁）。内題「先入鈔／正八位渡忠秋 纂述」と署名。本文三四丁。巻末に跋（三三丁）があり、「明治十三年七月／細辻昌雄謹識」と署名。刊記「明治十三年十二月二日出版々権御願／同十

四年一月十八日版權免許／同年一月刻成発兌／纂述人 京都府平民渡忠秋（住所省略）／出版人 京都府平民細辻昌雄（住所省略）／売捌人 京都府平民若林茂助（住所省略）」。

古今集巻二十の注釈である。細辻の跋によれば病氣致仕した師に請うて受けた講義をまとめたものという。題名の由来は歌を学ぶに先人の教えに泥んではいけないの意という。巻二十のみであるのは全てを読み明かすのはなかなか困難なので、「特に優れたらん第二十の巻のうたのさまをよく味」わうようにとの師の教えであるからと言う。

若干の今按もあるが、正義（香川景樹）と打聞（賀茂真淵）の引用が主で、他は余材（契沖）、遠鏡（本居宣長）、梁塵後抄（熊谷直好）などで珍しいものはない。

渡忠秋（わたりただあき、一八一― 八一）は歌人。近江高島郡船木の人。初め歌道を中江千別に、のち京都に出て香川景樹に学ぶ。また、漢学を伊藤東峯について修める。三條実美に仕え、維新後は宮内庁に出仕、御歌所で歌道御用掛を勤めた（国書人名辞典）。旧派歌人として著名で、家集に『桂蔭』（「桂蔭」は忠秋の号）。『楊園詠藻』がある。

2、^標古今和歌集 内藤萬春子 明治十七年九月 山梨 内藤
伝右衛門刊 袋綴中二冊

縹色布目表紙。左肩単郭題簽「^標古今和歌集 上(下)」。見
返し、単郭中を三分し「内藤萬春標註/^標古今和歌集/版權免
許 内藤蔵」。題辭「生於志」「形於言」「明治十七年八/月甲
府客舎/書」「伯爵柳原前光」。

真名序、「^標古今和歌集序 紀淑望」として、訓点、送仮名
のみ。

次に仮名序(注なし)があり、続いて「例言」がある。以下
に前半を引用する。

一世にありふれたる本は文字の誤れる仮字のたかへるあまた
ありて家の児等にをしふるにも便りあしければそれら正し
てむとてものしたるをこたび人のすゝめによりてすり巻と
なしつ尚いたらぬふしもあらむ見む人えりさだめてよ

一古くより伝れる本の注釈はなへて省きつただ題(詞書、稿
者注)中の名義事実と歌主の年代系譜のみを題末或は頭書
に加へつ

一歌の意は遠鏡によりて大かたはしらるべければこゝにはな
べてものせす

一仮字序には古くより佗し詞のまされるあまたありとて近世
大人たちの説おかれたるによりて今は原文のみを挙げつ見
む人己がさかしらこゝろにえりすてたりとな咎めそ

(後略)

内題「^標古今和歌集巻第一/内藤萬春子標註」。巻二以下は
著者の署名はない。

上冊、本文三二丁で巻一から巻六までを収め、その他巻頭に
題辭二丁、真名序二丁、仮名序四丁、例言一丁がある。

下冊、本文三五丁で巻七から十、巻十六から十八を収め、そ
の他跋一丁がある。

跋は「^標古今和歌集跋」として、「明治十あまり七とせなが
月十まり四日/八城駒雄」と署名する。文中に「斯くて女子等
に歌ををしへむにはまつ恋の歌は省ける方よからむとのあげつ
らひ世にしばゝありと聞かれたるよりこはすべて初学の手寄
に物したればとて暫くこゝに省きてそは別巻になしつるとぞ」
の字句がある。

奥付「明治十七年六月三日 版權免許/同 十七年九月 出
版/標註人/山梨泉平民/内藤萬春/西山梨郡常盤町四番地/
出版人/山梨泉平民/内藤伝右衛門/西山梨郡常盤町四番地/

印刷 内藤活版所。

さて、本書には現代の我々からすると特異な点がいろいろある。

まず、仮名序の大幅な改訂である。

仮名序は注はなく、古注、六義の例歌を省略するほか、本文に改訂があり、末尾に「右は難波本と景樹本とを考へあはせて我師堀大人(秀成、稿者注)が定められたるにより」とする。改訂は注記せず改める。左記のような箇所である。

やまと歌は。ひとつ心をたねとして。

むつにはいはひ歌なり

古しへよりかくつたはるうちにも。かきの本の人まろなむ。

歌のひじりなりける。また山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしくたへなりけり。

「こゝに古しへの…たがひになむある」を「よはとつきになむなりにける」の次に移す。さらに「いにしへの事をもつたをもしれる人よむ人おほからず」を省略。

大友の黒主は。心やさしくて其さまいやし。

それかしら詞は春の花の匂ひすくなくして。

これらは現代からすると考えられないことであるが、以下の

注釈には同様のものもあり、必ずしも当時においては異例ではない。但し、人まると赤人の箇所の大幅な省略と「こゝに古しへの…たがひになむある」の移動と以下の省略は珍しい。この改訂は、仮名序末尾の注記のごとく著者の師堀秀成(一八一九—八七)の案によるものと思われる。秀成にはいくつもの古今集注釈書がある(いずれも未刊)が、その一つ『古今序講本』(斯道文庫本、他に国会図書館本あり)の仮名序と比較すると、大改訂を含めてほぼ一致する。秀成の師は後述する仮名序の改訂に関わった富樫広隆(一七九三—一八七三)であることから、広隆の影響を考えるべきかもしれない。

さらに珍しいのは、教育に良くないとして、恋部を全て省略したほか、巻十九、二十もない点である。恋部の省略は^{註校}古今和歌集(岸本宗道)にも見られ、例がないことではないが、やはり珍しい。また、巻十九、二十の省略は理由が明らかでないが、同じく5が長歌を作歌上参考にならないとして省略したこと、関係があるかもしれない。

なお、本書の注は例言で著者自らが言うように、歌注のみで、しかも簡略である。標註と本文中のものとがあるが、前者はほとんど作者や地名など事実の注、後者はごく僅かで、しかも詞

書の注のみで解釈に及ぶことはほとんどない。

内藤萬春子（ないとうますこ、一八二三—一九〇一）は幕末明治期の女流歌人。甲府の書肆温故堂内藤伝右衛門の女に生まれ、和歌、筆蹟を善くし、維新の志士との交遊があった。明治三十四年二月二十日没、七十九歳（市川太郎編著『近世女流書道名家史伝』昭和10刊、市川義郎。著書に『教訓百首』、『新刻日本史略字引』（明治20刊）、『帝國歴史文章字典』（明治29刊））などがあり、後二書は本書と同じく自家温故堂から出版されている。

3、古今和歌集講義 本居豊穎 明治二十年八月〜二十七年九月（未完） 東京 大八洲学会刊 四六版五冊

本書は国会図書館本（初版三冊、書肆による合本）と早稲田大学本（再版五冊）によって記すが、初版の形態を復元出来なかった。また、本書は完結しなかったと考えられる。

まず、国会図書館本は左記の通りである。

第一冊（仮名序、春歌上下、夏歌）。

表紙は飾枠中を三分し、「本居豊穎講義 / 田所千秋筆記」 / 古今和歌集講義（右より「初編上」） / 明治二十年八月発行 大八洲学会。内題「古今和歌集講義 / 序 / 本居豊穎講義 / 田所千秋筆記」。本文三三

五頁。

奥付「明治二十年六月七日版權免許 / 明治二十年十二月廿八日出版 / 講義兼出版人 / 和歌山県土族 / 本居豊穎（住所省略） / 筆記兼出版人 / 兵庫県土族 / 田所千秋（住所省略） / 出版人 / 兵庫県土族 / 魚住長胤（住所省略） / 発行所（住所省略）大八洲学会」。

第二冊（秋歌上）。

表紙の形態は第一冊に同じく、「初編上」が「二編上」に、「明治二十年八月発行」が「明治廿二年十月発行」になっている。本文一〇〇頁。

奥付「明治二十二年十月廿三日印刷 / 明治二十二年十月廿五日出版 / 著者 / 和歌山県土族 / 本居豊穎（住所省略） / 筆記者 / 兵庫県土族 / 田所千秋（住所省略） / 印刷発行者 / 兵庫県土族 / 魚住長胤（住所省略） / 発行所（住所省略）大八洲学会」。

第三冊（秋歌下、冬歌）。

表紙は飾枠中を三分して、「本居豊穎講義 / 門人筆記」 / 古今和歌集講義（右より「二編中」） / 大八洲学会。同様の扉がある。本文は第二冊と通し頁で一八六頁までである。

奥付「明治廿七年九月廿七日印刷 / 同年同月三十日発行

／著作者／和歌山県土族／本居豊頼（住所省略）／発行者 佐藤龍太郎（住所省略）／印刷者 近藤圭造（住所省略）／印刷所 近藤活版所（住所省略）／発行所 大八洲館^{マツ}（住所省略）／発売所 六合館書店（住所省略）。

国会図書館本を見てもまず不審なのは、第一冊の表紙に「明治二十年八月発行」とあるのに、奥付には「明治二十年十二月廿八日出版」とあること、また、本書の第一冊と第二冊は連続しているのに、第一冊の表紙に「初編上」とあって、中も下もないことである。さらに第一冊巻末広告の「大八洲学会発行書目」では、全五編で完結する予定になっていて、初編上は「序文の部」、初編中は「春之歌の部」で「九月発行」、初編下は「春歌の部并夏歌の部全」で「十二月発行」とされている。

これを後述する早稲田大学本と比較し、その奥付から推測すると、本来初編は上中下三冊であって、上が仮名序、中が春の過半（春下の112番歌まで）、下が春の残り^{マツ}と夏^{マツ}となっていて、上が明治二十年八月、中が十月、下が十二月に刊行された^{マツ}と見られる。国会図書館本は初編三冊が刊行された後、一冊に合本して発売されたもの^{マツ}と考える（合本は図書館の所為とも考えられるが、改装されているようには思えない）。

従って、国会図書館本は表紙は初編上^{マツ}のものを、奥付は初編下^{マツ}のものを使用している^{マツ}のであろう。頁は通っているが、二編二冊も通し頁であるゆえ、本来三分冊であっても差支えない。

一方再版である早稲田大学図書館本は左記のようである。

第一冊（仮名序）

表紙は国会図書館本（以下「初版」と称す）第一冊と同じであるが、「明治二十年八月発行」の文字はない。年月の表示がないのは以下の表紙に共通する。また、同一の扉がある。内題は初版に同じ。本文二二頁。

奥付「明治二十年六月七日版權免許／明治二十年八月廿二日出版／明治廿七年三月廿五日再版印刷／明治廿七年三月廿八日発行／著作者／和歌山県土族／本居豊頼（住所省略）／発行者 渡辺兵吉（住所省略）／印刷者 熊田宜遜（住所省略）／印刷所 熊田活版所（住所省略）／発行所 大八洲学会（住所省略）／発売所 六合館書店（住所省略）」。

第二冊（春歌上、但し、古今集の春歌上ではなく、春歌下中^{マツ}途112番歌まで）

表紙は第一冊に同じく、「初編上」が「初編中」となっており、扉もまた同じである。内題は「序」が「春歌上」となっ

いる。本文は通し頁で二五九頁まで。

奥付「明治二十年六月七日版權免許／明治二十年十月十五日出版／明治廿七年三月廿五日再版印刷／明治廿七年三月廿八日発行／著作者／和歌山県土族／本居豊頼（住所省略）／発行者 渡辺兵吉（住所省略）／印刷者 熊田宜遜（住所省略）／印刷所 熊田活版所（住所省略）／発行所 大八洲学会（住所省略）／発売所 六合館書店（住所省略）」。

第三冊（春歌下、但し、113番歌以下、夏歌）

表紙は第一冊に同じく、「初編上」が「初編下」となっており、扉もまた同じである。内題は「序」が「春歌下」となっている。本文は通し頁で三三五頁まで。

奥付「明治二十年六月七日版權免許／明治二十年十二月廿八日出版／明治廿七年三月廿五日再版印刷／明治廿七年三月廿八日発行／著作者／和歌山県土族／本居豊頼（住所省略）／発行者 渡辺兵吉（住所省略）／印刷者 熊田宜遜（住所省略）／印刷所 熊田活版所（住所省略）／発行所 大八洲学会（住所省略）／発売所 六合館書店（住所省略）」。

第四冊（秋歌上、これは古今集の部立に従う）

表紙は第一冊に同じく、「初編上」が「二編上」となっており、

り、扉もまた同じである。内題は「序」が「秋歌上」となっている。本文一〇〇頁。

奥付「明治廿二年十月廿三日印刷／明治廿二年十月廿五日出版／明治廿七年四月廿三日再版印刷／明治廿七年四月廿六日発行／著作者／和歌山県土族／本居豊頼（住所省略）／発行者 渡辺兵吉（住所省略）／印刷者 熊田宜遜（住所省略）／印刷所 熊田活版所（住所省略）／発行所 大八洲学会（住所省略）／発売所 六合館書店（住所省略）」。

第五冊（秋歌下、冬歌）

本冊は国会図書館本の第三冊と全て同一である。

さて、この早稲田大学図書館本によって、明治二十七年に再版が発行されたことがわかる。内容は初版と同一と見られるが、初編（第一冊から第三冊まで）は行字詰は同一ながら組直し、二編上は奥付は異なるも同版、二編中は同一である。これは二編上のみ紙型が取ってあったということであろうか。

本書は講義筆記という性格のためか、打聞（打聴）、遠鏡、正義などにより、ごく穏当であり、解りやすいが特色に乏しい。仮名序については、古注などにも注が施され、改竄も少ない。それでも末尾近くの「この歌のもじあるをや、あをやぎの糸た

えず」の箇所を「あるをや」を行文として削除し、「この歌のもしあをやぎの糸たえず」とするような改訂がある。ただ、序や凡例がないこともあって、注釈するに当たつての立場の表明が一切なく、執筆意図ははっきりしない。また、中絶の理由は明らかでない。

なお、雑誌「文海」附録（明治26・4、27・3、この年月未確認、小泉菱三『明治大正短歌大年表』による）に「古今集序文講義一〇十」が連載されるが、内容は本書と同一である。定期的に再版と近いが、行字詰を異にする組直しである。内題下の「本居豊頼講義」が「本居豊頼先生講義」となっている。

本居豊頼（もとおりとよかい、一八三八—一九一三）は歌人・国文学者。名古屋の人。国学者、歌人の内遠の長子としてその家学を継ぐ。はじめ江戸の紀州藩校教授。維新後は神道界に活躍し、明治二五年東京女高師教授、三三年東大講師。文学博士。学士院会員。御歌所寄人をつとめ、大八洲学会に属し、「大八洲学会雑誌」（のち「大八洲雑誌」）の会主となり、国学者歌人を集め、二二年一〇月「大八洲歌集」を刊行。家集に『秋屋集』、歌論集に『歌談』がある（日本近代文学大事典）。

4、古今和歌集（日本歌学全書第一編の内） 佐々木弘綱・佐々木信綱 明治二十三年十月 東京 博文館刊 和中一冊

題簽に「日本歌学全書」とし、右に貼紙し、「第一編／古今和歌集／貫之家集／躬恒家集／友則家集／忠岑家集」と細目を記す。「動天／地感／鬼神」「明治庚寅（二十三）秋日」の三條実美の題字、明治廿三年十月の福羽美静の序、同じく佐々木信綱のはしがき（日本歌学全書のもの）、第一編の緒言がある。序とはしがきの間に折り込みの口絵一葉あり。次に、古今和歌集の部分は以下のようなようである。扉、雷文枠中を三分し、「佐々木弘綱標註／古今和歌集／東京 博文館蔵版」。内題は「古今和歌集／佐々木弘綱標註」とする。注は頭注形式。奥付は「明治廿三年十月廿七日印刷／明治廿三年十月廿八日出版」編輯兼発行者大橋新太郎（住所省略）／印刷者 宮本敦（住所省略）／発行所 博文館（住所省略）。古今和歌集の本文二〇四頁。

はしがきに「標註は古人の説さては自の考をもまじへたれど所せくて委しうはえかゝらず又は事繁くて大方はおのれにまかせたれば思ひ誤れる事どもあまた有べし」とする。したがって、事実上の著者は佐々木信綱である。

また、緒言に「仮字序は紀朝臣の作られしにていとめでた

き文なるを、後人の裏書所々に入て、今の本はいとみだりなれば、荷田翁の考をもとし、其後の人々の説によりて改め正したり。」とある。

本書の仮名序は古注を全て削除するのみならず、六義の例歌まで削除している。さらにまた、「ひとの世となりてすさのみことよりそみそもしあまりひともしはよみける」を「ひとの世となりてそ、三十もじあまり一もじはよみける。」とし、「人の世となりての下にすさのみことよりと今本にある十字は衍なれば省く」(傍線、圈点ママ)とあるなど、仮名序本文が添削されている。これは荷田翁の考や正義によるものと思われ、主として正義の序正文の改訂によつていようである。春満の説としては春満の家集『春葉集』下巻にある「東丸漫書信美臨書」と称する仮名序本文があるが、古注、例歌を省略するなど、改訂著しいものの、「すさのみことより」は存しており、それではない。近時『新編荷田春満全集』第六巻(平成18刊、おうふう)に収められた『古今集序註』にはこの箇所について、「又人の世となりてすさのをの尊よりそみそもしあまり一もじはよみける、と貫之のかけけるは誤なるへし、(中略)されは此所も素戔嗚尊の御名をのそきて、人の世となりてそ

もしあまり一もじはよみけりとせば、理り明かにして筋わかるへし」として一致する。また、同巻に収める『古今和歌集序釈』も同じ説である。春満の古今集注釈が翻刻されたのは近時であるにもかかわらず、佐々木信綱は当時既に知っていたのであろう。

本書は広く行われ、再版、増刷されている。その詳細は今明らかでないが、「明治廿三年十月廿七日印刷／明治廿三年十月廿八日出版／明治卅八年六月十日十二版発行」と奥付するものを初版と比較すると、はしがきまではオフセットにより、緒言以下全て組直しである。また、「明治二十三年十月廿七日印刷／明治二十三年十月三十日発行／明治二十六年四月 再版発行／明治二十九年七月 五版発行／明治三十八年六月 十版発行／明治四十四年一月 十一版発行／明治四十五年四月 十二版発行／大正二年七月十五日十三版発行」と奥付するものと比較すると、十二版、十三版は同一紙型を用いていることが判明する。ある段階から紙型に移行したものと思われる。内容は精査したわけではないが、改訂はないようである。

佐々木弘綱(ささきひろつな、一八二八 九二)は幕末明治の国学者・歌人。初名は習之助時綱。鈴山と号し、家を竹柏園

と号した。伊勢石薬師に生れ、曾祖父利綱以来字を以て聞えた。幼くして家学をつけ、一七歳で千首詠があり、山田なる足代弘訓の寛居塾におもむき学んだ。明治一五、子の信綱をともなつて上京、東京大学古典科・東京高等師範学校に教鞭をとつた。

のち辞して専ら民間にあつて、歌道と学問の発達に熱意をかたむけ、学問普及のために良書の出版に力をいたし、その著述編集にかかるもの三〇余部、中でも『日本歌学全書』は、和歌文学に本文を提供した功績は没すべからざるものである。…その他『詠歌自在』『開化新題和歌梯』『長歌改良論』は注意すべきものである（和歌文学大辞典）。

佐々木信綱（後年、『佐佐木信綱』と表記する、ささきのぶつな、一八七二—一九六三）は明治、昭和期の歌人、国文学者、三重県生れ。佐佐木弘綱の長男。号は竹柏園。帝大古典講習科卒。明治三八年東京帝大講師。『日本歌学史』（明四三）、『和歌史の研究』（大四）など歌学・歌学史の研究、『校本万葉集』（大一一四、共編）など『万葉集』の書誌・文献の研究に業績がある。また、三一年竹柏会を組織して機関誌「こころの華」（のち「心の花」）を創刊、和歌革新をはかる。歌集には『思草』（明三六）などがあり、式典歌・軍歌・唱歌の作詞も多い。

大正六年（一九一七）学士院恩賜賞受賞。昭和二二年文化勲章受章（新潮日本人名辞典）。

5、校古今和歌集 岸本宗道 明治二十五年十二月 東京 京堂書房刊 四六判一冊

穂積重領序文
井上頼国題詠

扉、飾枠中を三分し、歌集／東京堂書房蔵版。巻頭に一頁の穂積の文があり、末尾に「明治二十五年十二月 穂積重領識」と署名する。裏に「古今集の標註なれりとぎつて／言の葉の道の奥かをふみ見つゝ／知るべきものか道のおくかを／井上頼国」と歌一首が記される。

ついで、「古今和歌集／緒言」があるが、注目すべき点があるので、一部を左記に示す。

一この書は、専ら男女の教科に用ゐて、その弊なからむことを望むなるをもて、彼教育上に害極めて多き恋歌といふは、悉く除き去れり。これ、この書の教科に用ゐて大に適切なゆゑよしなりとす。そは十一巻より十五巻まで五巻を除きぬ。されど、かなしきかな。それにてさへ弊害のおほかるべき歌少ならず。さのみはとて省かず。こを教へ、こを学ばむとするもの、よろしくこころえおくべきことなり。

一この書に載せたる長歌は、その体拙くして、初学者の学ぶべきならざるをもて、恋歌とおなじく除き去れり。

一漢文の序、即ち真名序は、普通本には巻尾に載せたりといへども、漢文の序出で、仮字序の現れたりしことは、学者の異論なきところなるをもて、今これを巻首仮字序の前に出せり。

明治廿五年十二月十日

岸本宗道識

とある。

この緒言に断るように、本書では恋部がそっくり省略され、巻十六から巻二十が巻十一から巻十五に繰上っている。長歌ももとよりない。この点は先に述べた² 註標古今和歌集（内藤萬春子）と共通するところがある。

また、緒言のように、真名序が巻頭にあり（訓点送仮名を付すのみ）、仮名序注、歌注の順となる。墨滅歌はある。注は文語体である。やや漢学者風の口吻がうかがえるが、漢学者とも言えないようである。

内題「校註古今和歌集巻第一ノ岸本宗道校註」。但し、巻二以下は「校註」岸本宗道校註」の文字はない。本文二一九頁。

奥付「明治廿五年十二月十五日印刷ノ明治廿五年十二月十六

日出版ノ校註者 / 東京市神田区北神保町十二番地ノ岸本宗道ノ発行者（住所省略）高橋省吾ノ印刷者（住所省略）杉原辨次郎ノ発行所（住所省略）東京堂書房ノ西関発売元（住所省略）盛文館」。

本書は恋部を省略する事を見ても分るように、教科書的性格を第一にしていると解せられる。それにしても乱暴である。それがよく分るのが、仮名序である。古注と六義の例歌を省略するのは、明治大正期注釈書にまみ見られることであるが、本書は全く断りなしに省略している。さらに仮名序本文も無断で改訂する。誤植かと思われるもの以外でも、左記の例がある（下段が通行本）。

人の世となりてぞ三十文字あまり一文字はよみける。人の世となりてすさののみことよりぞみそもじあまりひともしはよみける

六つには、いはひ歌なり。むつにはいはひうた
十つぎになむなれりける。とつぎになんなりにける

万葉集に入らぬ歌、万えふしふにいらぬふるきうた
人をいはひ、人をもいはひ

それ、われら、詞は、春の花匂ひすくなくして、それ枕言

葉は春の花にほひすくなくして

この歌の文字、青柳の糸絶えず。このつたのもじあるをや、あをやぎの糸たえず

これによって、その様子がうかがえるであろう。

本書には紙型による再版がある。表紙中央に「校古今和歌集」とするが、扉はない（あるいは所見本の欠か）。以下は同じで、版元が移ったのみである。

奥付「明治廿五年十二月二十日版權登録／明治廿七年九月廿七日印刷／明治廿七年九月三十日発行／校註者 岸本宗道／発行者（住所省略）大橋新太郎／印刷者（住所省略）杉原辨次郎／発兌元（住所省略）博文館。」

岸本宗道（名前の訓み不詳）は伝未詳。

6、^{標註}参考古今和歌集 飯田永夫 明治二十六年三月 東京 文学倶楽部刊 四六判一冊

外題「^{標註}参考古今和歌集 全」。扉、飾枠中を縦界線で三分し「^{標註}賀茂真淵翁 校本 飯田武郷校閱／^{標註}本居宣長翁 校本 飯田永夫標註／^{標註}参考古今和歌集 全／東京 文学倶楽部蔵版」とする。巻頭に緒言、最後に「明治二十六年三月／標 者しるす」とする。内題なし。注は頭注形式。末尾に

「古今集作者一覽」を付す。奥付は「明治廿六年三月廿八日印刷出版」^{校註兼}飯田永夫／東京市本郷区田町三十三番地／発行所 文学倶楽部（住所同）／印刷者 三島讓三（住所省略）／印刷所 三島印刷所（住所省略）。

扉に「^{標註}賀茂真淵翁 校本」とあるのは、そのように称する「江戸後期」刊の版本を底本にした³ことが、緒言には「この集の異本¹²⁴は紀氏自筆本、兼好自筆本、貞心本、嘉録本¹²⁵、万治本、正義本等あり。上これら諸種の異本を校合し、よろしきをは皆かたはらに記し置けり。」とあって、若干の校合がある。仮名序については、古注は存し、甚だしい改竄は行わず、改訂した場合は断っている。注は平明で、特によったと見られる注はない。本文二一五頁。

本書は広く行われ、大正十一年三月十日に十八版まで刊行されている（発行所は林平次郎と文学倶楽部）。参考までに奥付の日付部分を左に掲げる。

「明治二十六年三月二十八日初版印刷発行／明治二十六年十一月三日再版印刷発行／明治二十七年七月十八日三版印刷発行／明治二十八年三月二十八日四版印刷発行／明治二十九年七月十八日五版印刷発行／明治三十年十一月十五日六版印刷発行／

明治三十一年三月十五日七版印刷⁽³⁾発行 / 明治三十二年九月十日八版印刷発行 / 明治三十三年十二月二十日九版印刷発行 / 明治三十五年四月十三日十版印刷発行 / 明治三十八年七月二十八日十一版印刷発行 / 明治四十年四月三十日十二版印刷発行 / 明治四十二年十月五日十三版印刷発行 / 大正元年八月三十日十四版印刷発行 / 大正四年五月一日十五版印刷発行 / 大正六年五月十五日十六版印刷発行 / 大正九年六月一日十七版印刷発行 / 大正十二年三月十日十八版印刷発行⁽⁴⁾。

このうち、初版、再版、十版、十二版、十八版を披見したが、十版と十二版は同版、他は組直しである。従って、十八版が実際何回組直しなのかは全て実査するほかない。

また、内容を比較すると、再版で増訂がなされ、以下は同一であることが判明する。再版では頭注に増訂がなされたほか、巻末に「古今集枕詞書解」⁽⁵⁾が加わって総頁数が二頁増加する(但し、増訂などの表示はない⁽⁶⁾)。

再版の奥付は左記のようである。

明治廿六年三月廿八日初版印刷出版

明治廿六年十一月三日再版印刷出版

以下は、初版と同じく、印刷所の「三島」が「三嶋」となっ

ている点のみ異なる(従って、「三島」「三嶋」と不揃いになる)。あわただしく増訂がなされた理由は不明であるが、先の引用でも分るように、初版は欠字や誤植がはなはだ多い。あるいはそれが原因かもしれない。

本書は、関東大震災を経て大正十四年五月十日に復興訂正第一版が刊行された(発行兼印刷者林平次郎、発行所六合館)。

これには「飯田武郷先生校閲 浜野知三郎先生校訂」とある(カバ―及び見返し)。内容は十八版と同じ。左に奥付の日付を示す。

「明治二十六年三月廿五日初版印刷 / 明治二十六年三月三十日初版発行 / 大正十四年五月五日復興訂正第一版印刷 / 大正十四年五月十日復興訂正第一版発行」。

飯田永夫(いいだながお、一八五四 ?)は『日本書紀通釈』で知られる武郷の男、嘉永七年二月七日生まれというが、伝未詳(名家伝記資料集成)。本書と同形式の『校訂竹取物語』(明治25刊)⁽⁷⁾、⁽⁸⁾『標註参考伊勢物語』(明治25刊)などがあるほか、『日本文典問答』(明治24刊)もある。

7、古今和歌集序解 岡吉胤 明治二十六年三月 東京 岡吉胤刊 菊判一冊

外題「古今和歌集序解 全ノ附大堰川行幸和歌序解」。巻頭に歌仙絵の口絵（「乃楽舎主人并録」と署名）、ついで岡の「古今和歌集解の首に記す」と題する文があり、末尾に「明治廿六年二月」の年記がある。文中「其中比の文詞は貫之ぬしをはじめとすへければ同じぬしのかゝれたるこの古今集序また土佐日記大堰川行幸和歌序などをかな文の模範とすへきよし先哲等もいひおかれしなればまづよくそをしりえて其後の物語ふみなどをも見るへきなり」とある。本書巻末に「大堰川行幸和歌序解」があるのはこのためである。つまり貫之の散文の注釈という立場である。内題「古今集序解ノ岡吉胤撰」。巻末に「大堰川行幸和歌序解」、さらに門人藤虎太郎による「乃楽舎大人著述目録」を付す。本文五九頁。内、古今集序解は一五四頁。

本書は仮名序の注釈である。古注は省略するが、六義の例釈は存する。字句の改訂はあるが、控えめである。著者の立場を反映して、神道的記述が目につく。

奥付「明治廿六年三月一日印刷ノ明治廿六年三月二日出版ノ著作兼ノ佐賀県土族ノ岡吉胤ノ三重県安濃郡新町大字ノ古河百六拾壹番地寄留ノ印刷人ノ三重県平民ノ田中房吉（住所省略）」。

岡吉胤（おかよしたね、一八三一—一九〇七）は檀舎・乃楽舎と号す。佐賀藩士。岡出雲・草場佩川・南里有隣・六人部是香・古川松根らに従つて国学・漢学・神典を学び、また和歌・画・書を能くした。維新後、神職となり、伊勢神宮禰宜を務めたが、のち皇祖教を創始、管長大教正となった。また、三重県津と茨城県水戸で教職についた（国書人名辞典）。古語拾遺略解（明治23刊）以下著書は多い。

8、^註新古今和歌集講義（中等教育和漢文講義） 増田于信・生田目経徳 明治三十年七月 東京 誠之堂書店刊 和半二冊

外題「^註新古今和歌集講義 上（下）」。^{見返}、上部に右より「中等教育和漢文講義」とし、飾枠を三分して、それぞれ「^註増田于信先生 講述ノ新古今集ノ東京書肆 誠之堂蔵版」。巻頭に「^註新古今和歌集講義はしがき」があり、末尾に「明治三十年六月廿五日 村雨莊主人識す」と署名する。村雨莊主人は増田于信。はしがき中に注釈書の歴史を述べた箇所がある。当時の認識を示すものとして、左に掲げる。

さて本集古来の註釈は、頭注密助あり。こは頭昭法師の注に。定家卿の勅を加へたるを。その孫慶融法師の集められ

たるものなり。また古今和歌集鈔あり。こは宗祇法師。東常縁の講釈を筆記したるものなり。また古今和歌深秘抄あり。宗祇法師の書き著したるを。常縁の校閲したるものなり。また古今宋雅抄あり。一名古今秘密抄とて。飛鳥井雅親入道宋雅の作といひ伝へたり。また古今抄延五記あり。

こは亮憲法師が本集一部の闇書にして。本集は延喜五年に成れるをもて。かく名けたり。また古今序注あり。了誉上人。仮字序の注解なり。また今川了俊の古今伝授あり。此後契沖阿闍梨の古今余材抄。賀茂真淵翁の古今和歌集打聽。本居宣長翁の古今集遠鏡。香川景樹の古今集正義出で来て。本集の解釈は。始めていと詳明にぞなれりける。此他なほ諸家の注書どもあまた出でたれど。いづれもこの四書の説の外に出でず。おのれ或人のもとめに応じ。右四書の説どもを参照して。大略にもものしつるを。事繁くて止みにたるを。生田目経徳氏。代りて残りなくものされたり。(後略)

内題「註新古今和歌集講義ノ増田于信講述ノ生田目経徳講述」。歌注は「古今和歌集卷第一講義」とし、卷一以下は「註新」の文字を加える。上冊(仮名序、卷一—十)本文二二六頁、下冊(卷十一—二十一)、上冊と通し頁で本文四四三頁。

奥付「明治三十年七月五日印刷ノ明治三十年七月十五日發行ノ講述者 増田于信ノ生田目経徳ノ發行者(住所省略) 伊藤岩治郎ノ印刷者(住所省略) 野村宗十郎ノ發行所(住所省略) 誠之堂書店ノ印刷所(住所省略) 株式会社 東京築地活版製造所」。

注は文語体で、語釈をし、最後に(大意)で訳文を示す。

仮名序は古注などの省略はなく、改竄もない。但し、文の不審は指摘する。真名序は省略し、本文も示さない。

概して慎重、穏当な解釈ぶりである。広告に「中等教育和漢文講習書」とあるが、教科書的人格を持つのであろう。同じく増田が関与する^{註校}古今和歌集と全く共通点がないことから、本書の注は主として生田目によるものか。

本書は教科書、あるいは参考書として相当に用いられたらしく、後の版がある。所見本は、第五版、第六版、第十二版である。第五版、第六版は紙型を用い、初版と同一である。但し、見返しは各版改めるほか、内題部分に第五版より象嵌による訂正がある。ついでを以て以下に記述する。

外題「註新古今和歌集講義 上(下)」。見返し、上部に右より「中等教育和漢文講義」とし、飾枠を三分して、それぞれ

「増田于信先生 講述／新 生田目経徳先生 講述」 全／東京書肆 誠之堂書店。

内題「^新古今和歌集講義／増田于信 生田目経徳 講述」。

第五版奥付「明治三十年七月五日印刷／明治三十年七月十五日発行／明治三十年十一月第二版発行／明治三十二年三月第三版発行／明治三十三年十二月第四版発行／明治三十五年十月十六日五版発行（以下同、略）」。

内題下の著者名の行取り、字配りが改められている。

ちなみに、第六版はほぼ第五版と同一で、左記のようである。見返しは基本的に第五版と同じであるが、別版で、さらに、上部の字句を「中教育和漢文講義」に誤る。

第六版奥付「明治三十年七月五日印刷／同年同月十五日発行／明治卅八年四月十五日第六版発行／講述者 増田于信／講述者 生田目経徳／発行者（住所省略）伊藤岩次郎／印刷者（住所省略）久米川治三郎／発行所（住所省略）誠之堂書店／印刷所（住所省略）明教社」。

これに対して、第十二版は全て組み直しである。内容は、字詰をふくめて第五版以下と同一である（第六版の見返しの誤りは正されている）。従って、本文頁数も同一である。

第十二版奥付「明治卅年七月五日印刷／明治三十年七月十五日発行／大正七年三月十五日第十二版発行／講述者 増田于信／生田目経徳／発行者（住所省略）伊藤岩次郎／印刷者（住所省略）大沢京之助／印刷所（住所省略）三賞舎印刷所／発行所（住所省略）誠之堂書店」。

増田于信（ますだゆきのぶ、一八六二—一九三二）は常陸の人。本居豊穎の養子、長世の父。國學院講師、宮内省図書寮御用掛。漢学者。昭和七年九月十四日没。七十一歳（名家伝記資料集成、和学者綜覧）。

生田目経徳（なまためつねのり）は明治大正昭和期の国文学者で、春雨亭主人の別号があり、著書、注釈書も多いが、伝未詳。本書の広告によれば、女子教育に従事するとある。

9、^校古今和歌集（^校勅撰二十一代集の内） 増田于信・落合直文 明治三十一年六月 東京 東京図書出版合資会社刊 和一冊

外題、中央題簽に「校註勅撰二十一代集古今和歌集 一」。見返し、重郭中を三分し、「^{増田于信}落合直文校訂標註／^校勅撰二十一代集／東京図書出版合資会社蔵版」。

簡略な「開題」に続き、真名序、仮名序、歌本文の順となる。本文一五四頁。

奥付「明治三十一年五月廿五日印刷／明治三十一年六月一日発行／校註者 増田于信／校註者 落合直文／発行者（住所省略）東京図書出版合資会社／代表者 西村寅次郎／印刷者（住所省略）多田栄次／発行所（住所省略）東京図書出版合資会社」。

頭注形式で、文語体である。注は特に歌注においては作者など人名の注、あるいは地名の注が多く、語釈、歌意に及ばない。仮名序注は多少は文意に及ぶが、やはりその傾向が強い。仮名序にまみえられる省略、改竄はなく、古注は括弧に入れて示している。

落合直文（おちあいなおぶみ、一八六一—一九〇三）は歌人、国文学者。初め桜舎、後に萩之舎と号した。鮎貝盛房の次子として、陸前国本吉郡松岩村生。明治七、仙台市神道中教院の総督落合直亮の養子となり、直文と改めた。二一、皇典講究所講師となる。この年、「孝女白菊の歌」を『東洋学雑誌』に発表。二二、国語伝習所の創立に与り主任講師として晩年に及んだ。第一高等学校・早稲田専門学校に教鞭を執った。二三、三、國

學院創立されるや講師となり、後学監補に挙げられ晩年まで力を尽した。没後『萩之舎遺稿』^{明治・三七}・『萩之家歌集』^{明治・三九}・落合直文集^二、^{昭和}をそれぞれ明治書院から刊行（和歌文学大辞典）。

10、進講筆記（続日本歌学全書第十二編の内）高崎正風 明治三十三年五月か 東京 博文館刊 四六判一冊

初印未見。明治三十三年五月二十日発行本による（但し、これが初印か。後述）。

外題「続日本歌学全書 第十二編／明治名家家集 下巻」。扉「佐々木信綱編纂／明治名家家集 下巻／東京 博文館蔵版」。扉裏に「明治名家家集／下巻目次」がある。ついで、税所敦子の自筆短歌、三條実美の懐紙、行誠上人自画讃、高崎正風、福羽美静、佐々木弘綱の短冊写真を口絵とする。さらに、日本歌学全書、続日本歌学全書総目次がある。次に「続日本歌学全書第十二編／佐々木信綱編／解題」とし、末尾に「明治三十三年五月」とする。高崎正風『進講筆記』は一四五—一五四頁に収める。

奥付「明治三十三年五月十七日印刷／明治三十三年五月二十日発行／編纂者 佐々木信綱／発行者（住所省略）大橋新太

郎／印刷者（住所省略）熊田宜遜／印刷所（住所省略）熊田活版所／発兌元（住所省略）博文館。

さて、本書は明治三十二年十二月発行とされることが多い。

それは、再版奥付に「明治三十二年十二月七日印刷／明治三十二年十二月十日発行／大正二年五月廿五日再版発行」とあるのによつたためではなからうか。解題に「明治三十三年五月」の年記があること、小泉冬三『明治大正短歌大年表』に明治三十三年五月刊となつていことから、明治三十三年五月刊の可能性が高いと思われる。なお、後考を俟つ。

また、明治三十三年五月本と大正二年五月再版本は同一紙型である。

さて、本書はわずか十頁の仮名序の一部の講釈であるので、取上げるまでもないのであるが、国語国文学研究史大成『古今集 新古今集』（昭和35刊）古今集は西下経一編）『研究書誌』の「六 注釈・鑑賞」に見えるので、あえて項を立てたものである。

本書は、高崎正風が明治十六年一月六日明治天皇へ進講したものを門人が乞つて再現してもらい、筆記したものである。末尾の門人香川景敏の文には、「こは吾師明治十六年一月六日御講

書始に進講したまひけるを兩陛下ふかく觀感まし／＼けるよしを御かたはらに侍らひて陪聽せしおもと人たちより伝へうけたまはりかゝる金玉の説を世に残しおかぬもくちをしきわざなれば師にこひて再講を煩はし筆記しおくものならず」とある。

内容は、仮名序の中「いまの世の中いろにつき」から「さかしおるかなりとしろしめしけむ」までの講義である。この箇所が選ばれたのは、天皇が和歌によつて諸臣の賢愚を知つたとする一文であるからである。わずかこれだけの箇所でも、「花をそふとて」は「花をもてあそふとて」の誤りだとして改めているのは、明治十六年という時代が感じられる。

高崎正風（たかさきまさかぜ、一八三六—一九二二）は歌人。鹿兒島生。父は島津藩士であつたが、冤罪によつて自尽、そのため一六歳で土籍をはがれ奄美大島に配流された。許されてから幕末多事の時、藩命を帯びて国事に奔走した。明治九に御歌掛、二二御歌所設置にあたり、初代の所長になる。幼少から学を好み、歌は八田知紀に学んだ。明治天皇の御製一〇万昭憲皇太后の御歌四万は、ほとんど彼が点したものである（和歌文学大辞典）。

11、古今和歌集評釈 金子元臣 明治三十四年一月〜四十二年一月 東京 明治書院刊 和半五冊

外題「古今和歌集評釈 第一（一）五」。見返、枠中を三分し「金子元臣著／古今和歌集評釈 第一（一）五／東京 明治書院」。第一冊巻頭に「凡例」があり、末尾に「明治三十三年十二月 真木のもとに於て／著者しるす」と署名する。内題「古今和歌集評釈／金子元臣著」。

全体の構成は以下の通りである。

第一冊（凡例、総論、仮名序、巻一 三二、本文一七〇頁）

奥付「明治三十三年十二月廿五日印刷／明治三十四年一月一日発行／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹一平／印刷者（住所省略）多田栄次／印刷所（住所省略）愛善社／発行所（住所省略）明治書院」。

第二冊（はしがき、巻四 七）、第一冊より通し頁で三六八頁まで。但し、「はしがき」は別頁立とする。

巻頭に「はしがき」があり、末尾に「明治三十五年七月下流／野州那須岳の麓の客舎に於て著者しるす」とある。

奥付「明治三十五年八月一日印刷／明治三十五年八月五日発行／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹一

平／印刷者（住所省略）三島宇一郎／印刷所（住所省略）弘文堂／発行所（住所省略）明治書院」。

第三冊（巻八 十二）、第二冊より通し頁で五八〇頁まで。

この冊以下題簽右に貼紙して部立を記している。

奥付「明治三十七年十一月廿五日印刷／明治三十七年十一月三十日発行／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹一平／印刷者（住所省略）綾部喜久二／印刷所（住所省略）宮本印刷所／発行所（住所省略）明治書院」。

第四冊（巻十三 十六）、第三冊より通し頁で七八八頁まで。

奥付「明治三十九年九月十二日印刷／明治三十九年九月十五日発行／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹一平／印刷者（住所省略）宮本敦／印刷所（住所省略）宮本印刷所／発行所（住所省略）明治書院」。

第五冊（巻十七 二十、真名序、作者列伝）、第四冊より通し頁で二〇六頁まで。

真名序は注はなく、訓点を付すのみである。巻末に作者列伝があり、名前の五十音順で引くようになっている。

奥付「明治四十年十二月三十日印刷／明治四十一年一月五日発行／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹

一平ノ印刷者（住所省略）三島宇一郎ノ印刷所（住所省略）
弘文堂ノ發行所（住所省略）明治書院。

本書は全巻刊行後まもなく菊判一冊に合冊した洋装本の訂正版が刊行された。本文注釈は和装本の紙型を用いているが、以下のような体裁である。

扉「金子元臣著ノ古今和歌集評釈 全ノ明治書院發行。

巻頭に新たに高野切の写真一葉を掲げ、初版の「凡例」の代りに「例言」とし、新たに稿を起している。

巻末「作者列伝」の次に「跋」があり、「明治四十年十二月元臣しるす」と署名する。次に「せの君の評釈をよみて 牧子あわび玉ま玉しら玉ほど」にひかりをそへし玉つくりはも」の一首がある。

新たに巻末に「類句索引」（初句と四句の索引）を付す。

奥付「明治四十一年六月廿五日訂正印刷ノ明治四十一年七月五日訂正發行」とある。著者以下は初版第五冊に同じ。

本書は明治期に刊行された古今集注釈書の中で、最も広く行われ、また重んじられた注釈書である。仮名序は基本的に改竄せず、時に改訂案を示している。（釈）と（評）にわかれ、特に懇切な（評）は本書の特色である。和歌の解釈のみならず、

和歌に関する様々な知識が得られ、歌人にも有用な注釈書であることが、歓迎された理由である。

本書には、関東大震災後、刊行された昭和新版がある。扉

「金子元臣著 昭和新版ノ古今和歌集評釈ノ東京 明治書院」。

巻頭に佐竹本三十六歌仙絵巻より紀貫之の多色刷一葉、高野切二葉（明治版とは異なる）及び本書明治版に著者が加筆した昭和新版の原稿一葉が掲げられている。ついで「昭和新版自序」があり、「堀の内松下荘においてノ昭和二年一月 金子元臣」と署名する。そこで著者が「これを覆刻の修訂のといふよりは、新著新版といふ方が確かに事実に適つてゐるほど變つてゐる。」と自負するよつに、かなりの加筆訂正がある。まず、明治版は文語体であつたが、昭和新版は口語体である。内容的にはもともと懇切丁寧な説明がさらに丁寧になつてゐる。自序に次いで「例言」があるが、かなり加筆されている。さらに注に先立つ「古今和歌集概説」は明治版では総論とあつたものであるが、大幅に加筆され、学界の研究の進展も加味されている。巻末は、「作者列伝」「類句索引」は同じであるが、「作者列伝」のつぎに「語釈索引」が新たに付されている。

奥付「昭和二年三月廿五日印刷ノ昭和二年三月三十日發行

(以下省略)。

本書は戦後まで刊行されている。

なお、金子にはほかに^{註校}『古今和歌集』(大正12・2刊)、

『古今和歌集通解』(昭和9・4刊)があり、いずれも明治書院より刊行されている。前者については20参照。後者は本書の昭和新版の抄出簡約本で、戦後まで刊行されている。

金子元臣(かねこもとのおみ、一八六八—一九四四)は国文学者、歌人。駿河国生れ。幕臣勝秀の長子。幼名富太郎。独学で国文学を修し、國學院大學、慶大の教授となる。歌は落合直文に知られ、明治二五年「歌学」を創刊したが通巻一四冊で終わる。『古今和歌集評釈』『枕草子評釈』『元本源氏物語新解』『万葉集評釈』など多くの注釈書を、いずれも明治書院刊行で著した。御歌所寄人。『金子元臣歌集』(昭二〇 明治書院)がある(日本近代文学大事典)。

12、古今和歌集序析義 鳥居忱 明治三十四年八月 東京 大日本図書株式会社刊 四六倍判一冊

外題「古今和歌集析義 全」。扉、外題に同じ。巻頭に「古今集析義序」があり、「明治三十四年八月四日 坂正臣」と署

名がある。ついで、「緒言」があり、「明治三十四年八月申読著者誌」とある。この「緒言」の内容は左記に項目を示すように、極めて整然としている。本書の特徴は論理的で、整然とした構成を取っていることにある。

【第一】本書撰者の旨趣

【第二】本書の参考書

【第三】本書の本文

【第四】本書の古註

【第五】本書の上欄

【第六】本文の解析

【第七】本文解析の標識

内題「古今和歌集序析義／紀貫之撰／鳥居忱釈」。

書名でわかるように、仮名序の注である。上下二段に分ち、頭注するが、下段は仮名序を細かく区切って構成を示すほか、注も書入れられている。基本的に自説は述べず、諸注によって構成する。巻末に「人物伝」として、「第一部 撰集人物」に醍醐天皇と四人の撰者、「第二部 引用人物」に大鷦鷯や六歌仙、人麿、赤人など仮名序中に現れる人名を『日本書紀』『大日本史』などを引用して示す。文語体。本文六三頁。

奥付「明治三十四年八月廿二日印刷／明治三十四年八月廿五

日発行／編輯兼
発行者 鳥居忱（住所省略）／印刷者 三浦喜久治（住

所省略）／印刷所 三浦活版所（住所省略）／発行所 大日本図

書株式会社（住所省略）／売捌所 松邑三松堂（住所省略）。

本書は緒言「第二」に参考書として十四種の注釈掲げると、

明治期のものとしては珍しく、中世注や写本の注釈も用いている。それらは左記のごとくである（書名は判りやすく改める）。

了誉序注、親房注、延五記、両度聞書、栄雅抄、余材抄、続

万葉論、打聽、遠鏡、正義、朗解（宮下正岑）、鄙言（尾崎雅

嘉）、古今和歌集序旧詞考（推易堂）、古格
正文古今倭歌集序。

栄雅抄までは中世注であり、親房注、余材抄、続万葉論、旧

詞考は写本によっている。

巻頭の坂正臣の序には「鳥居ぬしは、幼きよりまなびを好み、

榊原芳野翁に就きて、やまとのからのふみどもをよみとき、又

黒川の博士（真頼、稿者注）に従ひ、ふるこの学を修められ

歌よむわざは、日野直子、伊藤祐命などの人々に問はれ、から

ぶみの方には、ことにいたり深く、仏ぶみをさへにたどりて、

家に数千巻の書籍を積まれたりとか。」とあって蔵書家である

事が指摘されている。本注釈にはそれが反映しているようであ

る。

また、注釈書以外の諸書も引用するが、かなり個人的である。

例えば、「力をも入れずして天地を動かし」の箇所が歌徳説話

として『清輔雑談集』と『詞徳抄（和漢詞徳抄）』を複数回引

用するのは異色である。

本書は大幅な改竄はしないが、「古の事をも歌をも知れる人

詠む人多からず」（振仮名省略）に「衍文」と表示している。

鳥居忱（とりいまこと、一八五三—一九一七）は東京音楽学

校教授、作詞家。音楽関係では著名人で、『東京芸術大学百年

史 東京音楽学校第二卷』（平成15刊、音楽之友社）1293

頁に詳述されている。なお、生年月日は嘉永六年（一八五三）

八月二十二日生れとするものと、安政二年（一八五五）五月四

日生れとするものがあるが、前者が正しいという。また、没年

月日は大正六年五月十五日である。作詞では滝廉太郎「箱根八

里」が特に著名である。従って本書は専門外の著述とも見られ

るが、これ以前に『竹取物語析義（明治25刊）』、『方丈記析義

（明治31刊）』があり、本書巻末の広告にはさらに、徒然草、枕

草紙、土佐日記、更科日記、紫式部日記、伊勢物語などの析義

を出版する計画となっている（いずれも未刊）。

13、古今集詳解 中村秋香 明治三十七年三月、明治四十一年十月 東京 前川文栄閣刊 和半四冊

外題「古今集詳解 一（四）扉」中村秋香著 巻の一（四）／古今集詳解／東京 文栄閣蔵版。巻頭に提要あり、末に「明治三十六年十一月 門人 加藤きみ子／しるす」とある。内題「古今集詳解／中村秋香講述／加藤きみ子筆記」。

奥付「明治三十七年三月二十日印刷／明治三十七年三月廿五日発行／著作者 中村秋香（住所省略）／発行者 前川亦三郎（住所省略）／印刷者 三島宇一郎（住所省略）／発行所（住所省略）前川文栄閣（第一冊）、以下「明治三十七年六月一日印刷／明治三十七年六月五日発行（以下同じ、但し、「発行所」を「発所行」と誤植）」（第二冊）、「明治四十一年十月 日印刷／明治四十一年十月 日発行／著作者（住所省略）中村秋香／発行者（住所省略）前川又三郎／印刷者（住所省略）高塚慶次／印刷所（住所省略）三協印刷株式会社／発兌元（住所省略）前川文栄閣」（第三、第四冊）とある（欠字箇所は国会図書館本に抹消改竄あるため）。第一冊、仮名序、巻一、二、本文九九頁、第二冊、巻三十、本文は第一冊とは改頁で二四

四頁、第三冊、巻十一 十六、本文は第二冊から通し頁で四八〇頁まで、第四冊、巻十七 二十、本文は第二冊から通し頁で六六一頁まで。真名序はない。¹⁵⁾

本書は加藤きみ子の提要に「さいつ頃より日を定めて講をこひ、備忘のためにうち聞のまにまに書つゞりおきつるが、やつやつ積りて巻を重ぬるに至れるを、これかれが見て、こはよの常の注釈の類ならで、初学が見てもいとよく解し得べく、しかもいとめでたきときあかしなるを、いかでその垣内にのみはひめおくべき、道のためにひろく世にこそなど、あながちにそゝのかせば、やがて師に乞ひて、更にこゝかしこ補ひ正し、かうすり巻とはなしつるなり、」とあるように、秋香の講義を門人加藤きみ子が聞き取って整理したものである。そのため、「ぢや」が頻出するなど、講義の口調を残している。

仮名序注巻頭の秋香の文に「原く所は諸先生の力に依るものである、殊に此序文の如きは、普通本は誤も至て多き事なるに¹⁴⁾ 広く異本に校訂せられて説きおかれた事故、我々は労せずして、正しい説をも知る事が出来るといふは、実に辱く喜ばしい限であり升」（振仮名省略）とあるように、本書も仮名序において「すさのをのみことより」を削除するなどこの時期に行

われた本文改訂を行っているが、六義の例歌は「」はするものの、本行に組み、古注は（）にいられて小字とし、注を加えている。

解釈は概して先行の説に従い穩当で、丁寧でわかりやすいのが特徴である。

中村秋香（なかむらあきか、一八四二—一九一〇）は歌人。

駿河（現・静岡県）に生れた。国学、和歌を松木直秀に漢字を明新館に学んだが、八田知紀に教えをうけたこともあつた。不^ふ尽^じ之^の屋^や、槐陰書屋、松下庵などの別号も用いた。明治一九年八月刊の『新体詩歌集』に外山正一、上田万年、阪正臣らとともに新体詩をなしており、『新体詩歌自在』（明三一 博文館）という新体詩入門の書を出して新体詩詩人としても活躍している。三〇年一〇月、御歌所の官制が發布されたとき、寄人となった。歌集には『秋香集』（武藤元信編、明四〇・六 五車楼）がある（日本近代文学大事典）。本書巻末の広告の肩書には「宮中御歌所寄人」となっている。国文学関係では、『落窪物語大成』（明治34刊）は名著とされる。

14、古今和歌集新釈 井上通泰 明治四十三年刊

未見。国語国文学研究史大成『古今集 新古今集』の内、古今和歌集「研究書誌」の「六 注釈・鑑賞」に見える。

15、古今和歌集諸本陳列目録 国語学会 明治四十四年十二月

国語学会刊 菊判一冊

外題「古今和歌集諸本陳列目録」。内題「古今和歌集諸本陳列目録明治四十四年十二月三日」。

本書は内題にあるように、明治四十四年十二月三日東京高等師範学校において行われた古今集諸本並びに注釈書類の展観書目録である。本文一四頁。既に拙稿「西下経一 古今集研究の始発と行方」（『戦後和歌研究者列伝』平成18刊、笠間書院所収）で詳述したので省略する。なお、その際、西下氏が古今集の諸本研究にこれを利用していることを指摘した。

ところが、その後、本書を改稿したものが、「國學院雑誌」明治四十五年二月号に掲載されていることに気づいた。従って、展観の内容はそれで知ることが出来るわけである。「國學院雑誌」では、題名が「古今和歌集諸本目録」とされ、最初に「本篇は昨年十二月開会の国語学会に陳列せられし古今集諸本の目録にて当時配布せられたる印刷物を訂正したるものなり。参考

に資すること大なるを思ひ、同会の幹事三矢（重松、稿者注）氏に請ひてこゝに掲載せり。」とある。西下氏の「古今集伝本の系統論」（『国語と国文学』昭和4・1）には単に「古今集展覧目録」とのみあるので、西下氏が本陳列目録、「國學院雜誌」いずれを利用したかは確定できないが、国語国文学研究史大成『古今集 新古今集』の内、古今和歌集「研究書誌」の「二本文研究・諸本研究」には「國學院雜誌」の目録が掲げられているので、後者のようである。

16、八代集上（校註和歌叢書第三冊） 佐々木信綱・芳賀矢一
大正二年六月 東京 博文館刊 菊判一冊

扉 「文学博士佐々木信綱 校註 校和歌叢書第三冊／八代集 上巻／東京博文館蔵版」（註和歌叢書第三冊）の文字は隷書体で四角の枠に囲まれている。巻頭に口絵四葉（高野切巻五巻頭、後撰集秋上白川切、拾遺集雑春伝俊頼切、後拾遺集哀傷中院切）あり。「和歌叢書第三冊目次」「八代集上巻解題」と続くが、凡例のようなものはなく、解題も簡略である。頭注形式で、上巻は古今和歌集から後拾遺和歌集までを収める。本文八三二頁で、古今集は一 一七二頁。

奥付「大正二年六月十日印刷／大正二年六月十三日発行／編者 佐佐木信綱／編者 芳賀矢一／発行者（住所省略）大橋新太郎／印刷者（住所省略）河合辰太郎／発行所（住所省略）博文館」。

頭注は基本的に日本歌学全書の頭注を用いる。仮名序本文は日本歌学全書と異なり、古注や六義の例歌を省略したり、本文を改訂したりしてしない（改訂案等は注で示す）。そのため、日本歌学全書より紙幅に余裕があり、注が増補されている。一方、歌注は日本歌学全書をほぼ踏襲している。

芳賀矢一（はがやいち、一八六七—一九二七）は国文学者。越前国生れ。橘たちばなの曙あけみ覧門下の歌人で神官であった父真咲まさきの三男。明治二年東京帝大文科国文科に入学、二五年卒業、大学院に進み小中村清矩こなかみひらゆみの指導をうけた。三一年同大学の助教となり三二年から三五年まで文学史攻究法の研究のためドイツに留学、帰朝して教授に昇任した。留学中フィロロギー（文献学）の理論と方法を学び、あらためて日本の近世国学を日本文献学として再認識し、近代的学問としての国文学をその発展として根拠づけようとした。一方国語政策に力を致すとともに国定教科書や諸種の中等教科書を編纂して国民精神の振興に

努めた（日本近代文学大事典）。

17、評古今と新古今 尾上柴舟⁶⁰ 大正十一年四月 東京 弘道館刊 四六判一冊

扉「尾上柴舟著/評新古今と新古今/発売 東京 合名弘道館」。

巻頭に定家筆俊忠集切と高野切各一葉のコロタイプ口絵あり。

ついで、序があり、「大正十一年四月 著者識」と署名する。

さらに、「評新古今と新古今目次」がある。内題「評新古今と新古今 / 尾上柴舟著」。「緒言」に続き、「第一篇 古今和歌集」、「第

二篇 新古今和歌集」があり、「結尾」となる。本文四三六頁。

最後に「短歌索引」（初二句の索引）がある。

奥付「大正十一年四月二十五日印刷 / 大正十一年四月二十八

日発行 / 著作者 尾上八郎（住所省略）/発行兼印刷者 合名弘道館 / 代

表者辻本卯蔵（住所省略） / 発行所（住所等省略）合名弘道館」。

本書は古今集より二二一首、新古今集より一三一首を選んで

解説したものであるが、いわゆる選釈本ではない。古今集では

「一、季節の変化の尊重と題材の固定」「二、主観的傾向と推理

的傾向」、新古今集では「一、客観的傾向と色彩的観念」「二、

幽玄の趣致と放胆的道破」とそれぞれ主題を掲げて両集の歌を

取り上げて解説する。この場合、集の排列には関らず、連想によつて次々と歌があげられていく。その間の解説は著者の歌人としての立場を反映して、学問的というより、ままた鑑賞に傾いている。その一方、注釈的内容も多く含まれるので、選釈本的性格も持っている。

本書には訂正再版がある。

扉「尾上柴舟著/評新古今と新古今/発売 東京 弘道館」。

巻頭のコロタイプ口絵は高野切（初版と別のもの）と定家の自

筆詠草（道助法親王家十五首）に代わっている。序は削除され

ているが、以下は同じである。ただし、内題の署名「尾上柴舟

著」が「尾上柴舟述」になっている。本文は組直して活字が小さ

くなったため、三七八頁。「短歌索引」は初版と同様である。

奥付「大正十一年四月二十五日印刷 / 大正十一年四月二十八

日発行 / 大正十四年六月十五日訂正再版発行 / 著作者 尾上八

郎（住所省略）/発行兼印刷者 辻本卯蔵（住所省略） / 発行所（住所

等省略）弘道館」。

この訂正再版は新組で字詰はもとより、漢字仮名の区別も異

なっている。本文は基本的に同一であるが、改められている所

もある。特に目についたのは、新古今の部で取り上げられた歌

の数が一首増えて、一三二首になっている点である。それは初版で「ながめつゝ思ふもさびしひさかたの月の都のあけがたの空」の評のなかに引用されていた「見たせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮」の歌を一首として立て、そのあたりの文章を改訂したためである。その他にも小さな改訂がある。

この訂正再版は、恐らく関東大震災後の復興版なのであろう。

尾上柴舟（おのえさいしゅう、一八七六—一九五七）は本名八郎。歌人、書家、国文学者。旧津山藩士北郷直衛の三男として岡山県津山町（今の津山市）生。同藩士尾上勤の養子となった。第一高等学校を経て、明治三四、東京帝国大学国文科卒業。歌は初め大口鯛二に学び、後落合直文のあさ香社に加わった。

同三六車前草社を結び、若山牧水・前田夕暮・正富汪洋などがその門から出た。大正三石井直三郎・岩谷莫哀などによって歌誌『水蘊』が起るや主宰して没年に及んだ。女子高等師範・学習院・早稲田大学などに教鞭をとった。大正一二、平安朝草仮名の研究²²で学位を受け、昭和一二帝国芸術院（後に日本芸術院と改称）会員となった（和歌文学大辞典）。

18、万葉集 古今和歌集（新釈日本文学叢書第六巻） 物集高量 大正十一年十一月 東京 日本文学叢書刊行会刊 菊判一冊

『万葉集』と併せて一冊となる。頁数は万葉集、古今和歌集それぞれで改める。古今和歌集は巻頭に「解題」四頁があり、本文一四九頁。

奥付「大正拾壹年拾貳月一日印刷／大正拾壹年拾貳月五日発行／著作者（住所省略）物集高量／発行者（住所省略）川俣馨一／印刷者（住所省略）高橋賢治／発行所（住所省略）日本文学叢書刊行会」。枠外に右より「株式会社博文館印刷所印刷」とある。

本書は頭注本で、注は文語体である。注者の性格が漢語口調が目立つ。先行注との影響関係は不明であるが、訓詁中心で簡潔明快である。仮名序の字句の改竄や古注の省略はないが、「左註（古注のこと、稿者注）は、後人の筆にて誤謬多ければ次に註釈を加へず。」として、注を加えない。

本書には奥付に再版とするものがある（実は同版）。奥付は左記の通りである。

奥付「大正拾壹年九月一日印刷／大正拾壹年九月五日発行／

大正拾參年壹月拾日再版發行／著作者（住所省略）物集高量
／發行者（住所省略）川俣馨一／印刷者（住所省略）松浦政
吉／發行所（住所省略）日本文学叢書刊行會（枠外の文字初
版に同じ）。

印刷者が替っていることはさておき、初版発行日付がなぜか
初版と一致しない。

物集高量（もずめたかかず、一八七九—一九八五）は大正・
昭和期の国文学者。東京神田生まれ。物集高見の長男。筆名は
悟水。東京帝大国史学科卒。比叡山中学教員、「大阪朝日新聞」
記者、博文館社員等を経て、父と共に「広文庫」「群書索引」
の編集・出版に尽力、大正五年に完結させた。著に「百歳は折
り返し地点（昭五四）など（新潮日本人名辞典）。

19、古今和歌集新釈 佐佐木信綱 大正十二年一月 東京 広
文堂書店刊 菊判一冊

扉「文学博士佐々木信綱著／古今和歌集新釈／東京 広文堂
書店発行」。巻頭に口絵四葉（坂正臣「紀貫之の肖像」、高野切巻
五巻頭、本阿弥切、竹柏園藏本奥書⁷⁾あり。「古今集新釈目次」
「古今集総説」と続き、総説末尾に小字で本書の由来などを記

す。一部を以下引用する。

本書は、はやく日本歌学全書を編し、つづきて続歌学全書
を編しつる頃、八代集全部の註釈を試みるべく、上記先哲
の著書を参考取捨して筆を執りて筆を執りて筆を執りて筆を
せまほしきふし多きをもて、其まに架中にをさめおきつ。
さるに、さきに外山たか子ぬしの口訳宇治拾遺物語の刊行
を広文堂にあとらへし折、それを刊行するにつきて、何にま
れ予の著書をそふべきことを約するにいたりぬ。たまたま
本書の草稿のさながらあることを語りしをもて、かくは世
に出づることとなりぬ。（後略）

大正十二年一月 佐佐木信綱識

内題「古今和歌集新釈／文学博士佐佐木信綱」。本文四二四
頁。

奥付「大正十二年一月十日印刷／大正十二年一月廿日發行／
著者 佐佐木信綱／發行者（住所省略）大倉広三郎／印刷者
（住所省略）渡辺常三郎／發行所（住所省略）広文堂書店」。

注は頭注と本行の「釈」（釈文に若干の解説を加えたもの）
とで成る。文語体である。頭注は序注は大半新稿であるが、歌
注は日本歌学全書のものをかかなり流用している。「釈」は新稿

である。

20、註校古今和歌集 金子元臣 大正十二年二月 東京 明治書院刊 四六判一冊

扉 註校古今和歌集 (朱書)。巻頭に口絵コロタイプ一葉 (高野切巻五巻頭) あり。

「緒言」があり、「大正十一年十二月 金子元臣しるす」と署名。註校古今和歌集目次「類句索引」に続き、本文二〇七頁

(仮名序注、歌注、訓点付真名序、古今和歌集作者列伝を含む)。

奥付「大正十二年二月一日印刷／大正十二年二月四日発行／

著者 (住所省略) 金子元臣／発行者 (住所省略) 三樹一平／

印刷者 (住所省略) 竹内喜太郎／印刷所 (住所省略) 日清印

刷株式会社／発行所 (住所省略) 株式会社明治書院。

本書の性格を示す「緒言」を一部掲げる。

一、世に古今集の善本がありません。又手軽ないゝ単行本

も乏しいのです。されば本書は、全く時代の要求で生ま

れたものでありませう。

一、本文は、普通本を底本にして、傍ら諸本を参酌し、正

確な校合を施しました。

(中略)

一、序文は、後人の附註、及びその攙入と思はれる処を芟り出して、文理をとほしました。これでは、原文の真面目を窺へることになりませう。

(後略)

頭注本で、注は金子の『古今和歌集評釈』よりかいつまんでいる。評釈に倣って文語体であるが、平易である。

仮名序本文は評釈に倣って、改訂を施すが、評釈では括弧を付してともかく存在した古注や六義の例歌が略されてどこにも記載されないなど、必ずしも学術的でない。

なお、本書には昭和の改訂版がある。新組で、頭注には若干の改訂があり、いくぶん口語体になっている。

稿者の手許には昭和十三年の二十三版があるが、奥付その他が大正版と矛盾し、事情が明らかでない。いま、それを解説する。

扉 註校古今和歌集 (紫書) とし、その左に朱で四角の囲みの中に「改訂版」とする。巻頭にコロタイプ口絵一葉 (高野切二種、一種は大正版に同じ) がある。「緒言」は改訂され、やや専門的で、末尾に「昭和五年十一月／金子元臣」と署名して

いる。「古今集概説」を新たに付し、「校註古今和歌集目次」に続いて本文二三四頁。これには「古今和歌集列伝」と巻末に移された「類句索引」を含む。

奥付「大正五年十二月五日印刷／大正五年十二月十二日発行／大正十五年三月十日増訂印刷／大正十五年三月十五日増訂発行／昭和八年四月十日十九版／昭和十三年三月十五日二十三版／著者（住所省略）金子元臣／発行者（住所省略）三樹退三／印刷者（住所省略）綾部喜久二／印刷所（住所省略）宮本印刷所／発行所（住所省略）株式会社明治書院。

この奥付が大正版との関係、「緒言」の年記から見て信じがたいことは明かである。後考を俟つ。

注は大正版と大差ないが、仮名序において、新たに「それわれら、詞は春の花の句少なくして、」（「春の花の」は「春の花の」の誤か）という本文改訂がされている。

21、万葉集古今集新古今集選釈 石川誠 大正十三年一月 東京 大同館書店刊 四六判一冊

扉、枠内を三分し、「石川誠著／万葉集／古今和歌集／新古今和歌集選釈／東京 大同館出版」。巻頭に「序」があり、本書の性格を示すので、かい

つまんで引用する。

「文検受験者のためにはこの三歌集（万葉集、古今集、新古今集、稿者注）は必読の書である」「これ等受験者諸士の為、將た初学者のため、三歌集の中から適當のものを選んで本書を編んだ訳である。」「私は最初に現在広く行はれてゐる中等教科書類八種中からと、第一回より最近に至る文検問題中からとの三歌集の和歌を洩らさず抜萃した。」「万葉集百六十三首、古今和歌集百七十一首、新古今和歌集百六十四首、総計四百九十八首の略解を試み、併せて補遺九十一首を採録して頭註を施したのが本書である。」「猶、附録として巻末に『和歌史概要』一篇を添へたことは、我国歌壇の一般を了解せんとするもの便を計つた婆心に過ぎない。』などとなり、「偕楽園ほとりの寓居にて／編者識」と署名する。

次に、「例言四則」というのがある。項目だけあげておく。

一、和歌初学者のために

二、文検受験者のために

三、教授者諸士及学生諸君のために

四、和歌史研究者のために

次の「著者より」は伝の明らかでない著者のことが伺えるの

で、やや長く引用する。

本書は水戸の寓居で脱稿したのであつたが、間もなく秋田に転じたので、出版されたのは、当地に移つてから後の事であつた。私は曩に『文検受験用国語科研究者のために』と。文検受験用漢文科研究者のためにの二書を大同館から出版したが、本書と併せて、御批評や御叱正や、或は御不審の点などがあられるお方は遠慮なく左記宛に御申越を庶幾ぶ。

秋田市県立秋田高等女学校内

石川誠

次に「万葉集・古今集・新古今集選釈総目次」がある。

内題「万葉集・古今集・新古今集選釈／石川誠著」。

内容構成は次の通り。

第一編 三歌集解題

第二編 万葉集選釈

附補遺三十一首

第三編 古今和歌集選釈

附補遺三十首

第四編 新古今和歌集選釈

附補遺三十首

第五編 和歌史概要

附録

歌数一覧（原歌集の各巻から何首選択したかを示す）

参考書解説

索引（初句）

本文は巻末索引を除いて五〇二頁、第三編（古今和歌集選釈）は一七一―二九六頁。

奥付「大正拾三年一月 日印刷／大正拾三年一月二十五日発

行／著作者 石川誠／発行者（住所省略）阪本真三／印刷者

（住所省略）吉田松次／印刷所（住所省略）株式会社秀英社／

発行所（住所省略）大同館書店（欠字は国会図書館本に改竄

あるため不詳）。

両序については全く言及せず、短歌のみの選釈本である。

「選釈」は「語釈」と「大意」に分かれ、「補遺」に掲げられた

歌は本来の選釈の歌に比べて注が簡略で、頭注形式である。

本書は著者の序に見るように、主として文検受験者のための受験参考書である。出版元の大同館は同種の受験参考書を多数出版していた出版社である。巻末の出版目録を見ると、小林宋

子（歌人）といった当時の受験生に人気の注釈者がある一方、後年の大家石田吉貞、原田芳起の名が見える。

著者の石川誠については不詳。但し、大同館から同様の文検受験生向け参考書をいくつか出版していて、当時はよく知られた存在であったようである。

著者には後年、古今集全釈書^参「古今和歌集新釈」があり、同じく大同館より出版されている（昭和2刊）。解題と釈は、本書が利用され、全釈へと増補したものである。

22、古今集現代釈義 寺西飛水 大正十三年六月 京都 第一歩社刊 三六判一冊

初版未見。第二版による。

扉、枠中を三分し、「寺西飛水著／古今集現代釈義／第一歩社発行」。巻頭に著者の「はしがき」、ついで「解題」があり、「大正十三年弥生尽日／飛水道人 寺西聴学」と署名。一部を引用すると、「注釈書の」多くは訓詁に属すべきものか、さもなくば歌の意そのまゝを御丁寧にウツシたまでの事で、一種の散文として見るべきものがない様だ。甚だ^{ママ}潜越だが自分は、在来の注釈書と途を異にして、能ふ限り広義に解釈して一種の

散文に書き下してみた。」（振仮名省略）とある。

内題「古今集現代釈義／寺西飛水著」。本文一七七頁。

奥付「大正十三年五月廿五日印刷納本／同 六月五日第一版発行／同 同二十日第二版発行／^{著者発行}兼印刷人／京都府宇治郡山科村御陵／寺西聴学／発行所 京都山科 第一歩社」。

初版発行日付は小泉荃三「明治大正歌書綜覧」によれば大正十三年五月刊となっている。なお、第二版が組直しか否かは不明。

また、同書の解題に「古今和歌集の和歌を極めて自由奔放に現代語に釈いたものである。」とあるように、古今集より七一首をほぼ古今集の排列順に抄出して、解説する。両序に言及はない。但し、古今集の解釈というより、社会風刺的漫談である。著者が僧侶であることから、一種の説法と見ることも出来よう。また、恋部を省略することはない。

本書の性格を知るために、試みに一首引用する。

あき風の吹きつらがへす葛の葉のつらみてもなほつらめし
きかな（平貞文）

衆議院議員選挙に、〇〇派の公認候補として、花々しく出

馬した彼は、あはよくば政権を奪取し、在朝の大官として国政を料理したいといふ念願のあつたのも、開票の結果僅々五十票の差で、遂に勝を譲つたといふ敗報を手にした時、五体をわな／＼と顫はしたが、暫くすると稍々平静にかへつて、

『総ての人事を悉したのも、運命とあきらめて置く』と、嘔んで吐き出す様に叫んだ。並居る参謀連や運動員も、沈痛な表情をしながら、暫く沈黙がつゞいた。

更に第二報として、彼の参謀Wが、反対派と気脈を通じて、自己の手裡に在る七十余票を、敵の為に投せしむべく、奔走した事実が曝露した。一座は愕然として、一様に顔の色をかへた

『遺恨骨髓に徹する道理ぢや』

と、螺髯の様な拳をかためて、大安坐の膝頭を強く抑へながら、彼は大声に叫んだ。(後略) (振仮名省略)

これを以て様子に分るであらう。

寺西飛水(てらにしひすい、一八八九—一九四八・二・二六)

は京都山科浄土宗阿弥陀寺住職。聴字と称す。寺西聴信の長男

として誕生。宗教大学専修部をへて京都私立法政大学専門部に入り法律を学ぶ。一九一〇年(明治四三)阿弥陀寺の住職となり宗会議員、知恩院執事などの要職を歴任し、「大正新報」の発刊、『古今集現代釈義』、『舊巴尼公』を著わすほか、戯曲『法然上人』、歌集『花筏』、『埃の中で』などを刊行。宗教劇団を組織し京都南座などで公演、また三二年公衆浴場開設、四一年幼稚園創設、あるいは祥山書道学会主宰として地方浄化につとめた(浄土宗大辞典)。

23、^註頭古今和歌集作者別 早川幾忠 大正十五年一月 京都

弘文堂書店刊 四六判一冊

扉、単郭内を三分し、『早川幾忠編著』^註頭古今和歌集作者別

／発兌 弘文堂書店。巻頭に「緒言」があり、末尾に「大正

十三年春三月 撰津千里山の寓居にて／早川幾忠しるす」と署

名する。次に「凡例(並に雑記)」及び「^註頭古今和歌集作者別

目次」(作者名の五十音順で本文の配列順ではない)、「初句索

引」がある。内題「^註頭古今和歌集作者別」。巻末に「巻末記」

があり、「大正十四年十一月二十二日／早川幾忠謹記」と署名

する。本文二一六頁。

奥付「大正十四年十二月二十五日印刷／大正十五年一月一日
発行／著作者 早川幾忠（発行兼印刷者） 八坂浅次郎（住所省略）／発
行所（住所省略） 弘文堂書店。

本書は古今集を作者別に改編したもので、「凡例」によれば、
配列順は入集歌数の多い歌人順とし、次により人しらず、最後
に大歌所御歌等作者名を記さぬ歌を並べている。従って、巻頭
は紀貫之よりはじまる。各歌に部立と各巻毎の歌番号を付す
（国歌大観番号は用いられない）。また、「註頭」とあるように、
簡略な頭注を付している。「凡例」によれば、これは書肆の希
望で早急に作成したという。両序は巻末に収める。仮名序は古
注を頭注とするが、六義の例歌も頭注とする。「凡例」に「脱
落と看做さるゝ文字を補つて、原文の首尾を疏通させるやうに
した。」とあって、「むつにはいはひ歌（なり）。「きのふは栄
えおこりて、（けふは）時をうしなひ」「いはば）しほめる花
の、いるなくて、「大伴の黒主は、（心はをかしくて）そのさ
まいやし。」の四箇所でことばを補っている。古注を頭注にす
るには、打聴を、ことばを補つには正義を参照したと記す。真
名序は返点、送仮名を付すのみである。

底本は「緒言」に国民文庫八代集本を用いたが、近世の注釈

書の説を参考にして改めたとする。

「巻末記」によれば、本書は土岐善麿編『作者別万葉集全書』
（大正11刊）に刺激を受けて編まれたものという。

早川幾忠（はやかわいくただ、一八九七—一九八三）は歌人、
画家、書家。東京府砂村（現、江東区砂町）生まれ。さまざま
の職業を経験しつつ、多才の本領を発揮するに至る。一九
一五（大4）年、松倉米吉らと「行路詩社」結成。一八年、金
子薫園の「光」同人となる。二九年、「高嶺」創刊、主宰とな
る。歌のみにとどまらず、書、画、篆刻、陶彫をよくし、琵琶
を弾じ、最後の文人といわれる。歌集に、『紫塵集』（三四・五
高嶺社）、諸作品を大成した豪華本の『七十有七年』（七四・三
初音書房）、『八十有八年』（八二・三 完石山人記念集刊行会）
がある。歌論に、『中院歌論』（六五・四 初音書房）、『続中院
歌論』（六九・七 同前）、『万葉集私燭』（九五・四 私家版）
他がある（現代短歌大事典）。本書は早川の著作としては初期
のものである。

24 萬葉古今集動植正名 山本章夫 大正十五年十月 京都
山本規矩三刊 袋綴半一冊

茶色表紙、左肩題簽「萬葉古今動植正名」(著者自筆)。口絵一葉、著者写真あり。自ら「自題肖像 七十七翁溪愚」と署名、「溪愚山本章夫翁」と題字する。

巻頭に嗣子山本規矩三の「はしがき」がある。本書の成り立ちや性格を知るために有用なので、抄出する。

「ふみの名を正名とつけられぬ、そはかの論語に、必也ヤ正セ名乎」といへる句あるに本づきたるもの。「本書標題は、かつて原稿に手づから書つけおかれしもの、又はじめにかゝげし肖像は、喜寿のみぎりに、うつしのこされしもの」「もとのふみには、緒言などありて、その中に通音転音などにつき、新に一家言をしるされたれども、先考世にありし日、かつてみづからけしおかれたれば、こゝにははぶきぬ、また引き用ひられたる歌にも、それ／＼意解を施されたれども、こもまたわづらはしと思はれけむ、ともにけしおかれたれば、いとをしき心地すれども、これもはぶきぬ、」「ことし、あたかも先考身まかり給ひしより、二十とせあまり三とせになりぬれば、世俗にならひて、いさゝか思ひいでしものせむと、おもひたちぬれども、…」
末尾に「大正十五年十月／先考二十三回忌辰にあたりて／不肖男 山本規矩三謹みてしるす」と署名する。

次に「部目」として、部を列挙する。左記のようである。

艸部(上)・艸部(下)・木本艸部・竹部・木部(上)・木部(下)・鳥部・獸部・魚部・虫部・図(著者えがくもの)

さらに目次が「萬葉古今動植正名／艸部上目次」のようにあり、各部巻頭に分出する。

内題「萬葉古今二集動植正名／山本章夫輯」。本文一八三丁。

奥付「大正十五年十月一日印刷／大正十五年十月五日発行／著

作者 故山本章夫／発行者 山本規矩三／京都市下京区油小路通五条北入上金仏町二百五十番地

／印刷者 須磨勸兵衛(住所省略)／印刷所 内外出版株式会社印刷部(住所省略)。

本書は、万葉集、古今和歌集より動植物が現れる歌を抜出し、

先の部目に従って並べ(部目の中は第一字のみ五十音順)、動

植物の説明を加えたものである。歌は所在巻数、作者名のみが

記されている。

著者は左に記すように、本草学者で画家であるので、巧みな

写生図も添えられている。

山本章夫(やまもとあきお、一八二七 一九〇三)は画家、

また本草学及び経書に精はし、京都の人、幼名を正九郎と呼び、

維新後章夫と改め、溪愚と号し対竹齋主人と称す、家世々医を

業とし本草に精はし、光格天皇嘗て採葉使に補せんとして果さず、少時画を徹山竹山に学び写生を善くす、凡そ写す所の草木鳥獸虫魚数千品に上る、孝明天皇嘗て都下有名の画家に命じ絵かるた各百葉を献せしむ、…章夫の写生を供得し始めて能く功を奏すと云ふ、…既にして思ふ所あり官を辞して京都に還り、

断然医業を廃して専ら子弟に教へ詩文を属し経義を研鑽す、十三年十月久邇宮邦彦王の画学指南を命ぜられ十五年七月より経書を進講す、…此の間京都博覧会品評部長、京都美術工芸学校囑託教師、日本弘道会京都支部講師となれり、…三十六年十月二十七日逝く、年七十七、著書中最も有名なるは日書補註にして清国湖南省新学堂の教科書に採用せらる、其の他万葉古今動植正名等あり、京都深草宝塔寺に埋葬す（大日本人名辞書）。本草学者山本亡羊^⑧（一七七八—一八五九）の子。

25、校古本古今和歌集 尾上八郎^⑨ 大正十五年十月 東京 雄山閣刊 四六判一冊

外題「校古本古今吟歌集」。扉「校古本古今和歌集 尾上柴舟著」。巻頭に元永本のコロタイプ写真一葉あり。「例言」末に「大正十五年十月 校註者しるす」と署名。目次題「校古本古

今和歌集目次」。内題なし。本文三三〇頁。

奥付「大正十五年十月廿五日印刷／大正十五年十月三十日発行／著作者 尾上八郎／発行者（住所省略）長坂金雄／印刷者（住所省略）上田栄吉／印刷所（住所省略）泰文堂印刷所／発行所（住所省略）雄山閣」。

本書は元永本を翻刻し、筋切、通切などで校訂したものである。但し、翻刻といっても、漢字を当て、仮名遣を改めるなど、原本の面目をかなり損じている。また、脚注に普通本（「普本」とする）との校異を記し、その他校異以外の注も若干ある。「例言」に「註釈は数多くつける積であつたが、諸本を併せて校訂したため、場処が狭くなつたので、止むなく少なくしておいた。」とある。また、「猶本書出校に就いて、力を添へられた田淵乗好、石川佐久太郎両君に謝意を表する。」と協力者名が挙げられている。

本書はこれ以前に刊行された元永本の翻刻本『古今和歌集』（大正11・5刊）上下二冊の普及版的性格を持つものである。

後者は和装大本で巻頭に凡例と二葉の木版刷があり、巻末に「元永書写古今和歌集の印行に就て」と題する一文があり、「大正十一年五月六日 尾上八郎識」と署名する。奥付には「大正

十一年五月二十五日印刷／大正十一年五月二十八日発行／編輯者発行者（住所省略）田淵乗好／印刷者（住所省略）佐藤保太郎／印刷所（住所省略）株式会社文祥堂印刷所とある。本書に比べれば、原本に忠実な翻刻であるが、それでも改行の關係で仮名に漢字を当てるなど、現代の感覚では到底忠実な翻刻とは言えない。貞応本、嘉禄本による校異が傍注されている。

おわりに

本稿を終えるに当って、問題点を指摘しておきたい。

一つは、この時期の注釈書が古今集の本文、殊に仮名序について改竄をためらわないことである。これは近世国学者の間で、それまでと異なり、古今集本文を改訂しようとする動きがあったことの延長であろう。ただし、近世国学者の改竄を受継ぐだけで、新見はないといえる。その際参考とされた説は、真淵、宣長もあるが、中心は荷田春満、富樫広蔭、香川景樹のものである。ところが、景樹の場合は『古今和歌集正義』の正文によって内容が知られていたものの、春満、広蔭の説は、現代の研究者の視界の外にあつたといつて過言でない。春満の場合、ようやく新編全集第六巻の刊行（平成18刊）でその古今集

注釈の実体が明らかになつてきたが、広蔭については「紀氏直伝解」は伝本少なく、また、明治期の注釈家が用いたのはこれではないらしい。金子評釈は総論の「証本及び註釈書」に広蔭の注釈書として「塵払」なるものを掲げるが、実体不明である。しかも、単なる術学の所為でないことは、内容に触れており、披見したことは疑えない¹⁰。つまり、明治期の研究者の常識と現代の研究者の常識に齟齬があるようである。このあたりの調査が必要である。

もう一つは、13中村詳解（明治37 41成）以後、注釈書らしい注釈書が現れなくなったことである。唯一の例外19佐佐木新釈（大正12成）は旧稿をやや消極的に刊行したものである。これは正岡子規の「歌よみに与ふる書」（明治31成）の影響があるのではないか。やや時差があるようにも思えるが、それまでの古今集の權威を考えれば、やや時を経て影響が現れても不審ではない。

再び古今集の研究が活発になるのは、本稿の最後に挙げた25尾上八郎の元永本の普及版（大正15成、翻刻本はそれに先んじて大正11成）あたりからである。西下経一「古今集伝本の系統論 特に俊成本定家本清輔本の研究」(「国語と国文学」昭和

4・1)は古今集にも伝本研究の時代が来たことを告げるものであるが、巻頭の序説で国文学研究法について述べていることから分かるように、明らかに研究法に対する自覚が認められる。古今集を無条件に権威とするのではなく、文学的価値のみで見られるでもない新しい新し昭和の古今集研究を感じさせるものがある。

その意味で、この断絶を越えて第二次大戦後まで生き残った11金子評釈昭和新版の意味は小さくない。稿者の学生時代この本はまだ現役であった。今回久しぶりに披いてみて、古今集によつて和歌の良さを教えようとする態度に好感を抱いた。やはり明治時代の代表的注釈書といえよう。

[注]

(1) ここに言う「難波本」と「景樹本」とは、香川景樹「古今和歌集正義」で景樹が引用する「難波本」と景樹校訂本(正文)とを指すのであろう。「難波本」は仮名序のみの古写本らしく、景樹は「紀氏の自筆と云伝て難波人遠里何かしかもてる古本」と述べている(「みつにはなすらへうた」の注)。また、この名称は六人部は香も用いており、稿者

はかつて「本文は唐紙卷子本に近い。」と述べたことがある(拙著『六条藤家歌字の研究』441頁、平成11刊、汲古書院)。

(2) 後の版では和装になっているものがある。

(3) 拙稿「古今和歌集」版本諸版一覧(「斯道文庫論集」18昭和57・3)の29、「古今和歌集版本考 前稿の補訂をかねて」(「斯道文庫論集」34平成12・2)及び「古今和歌集版本書影集」(「斯道文庫論集」36平成14・2)の30として掲げたもの。

(4) 頭注の増訂の目安は、仮名序冒頭で、初版が「天地を動かすとは歌によりて雨降り怒濤をもしつむるをいふ」とあるのが、増訂版では「天地を動かすとは歌の徳には天地の神靈も感動し玉ふをいふ、即、祈雨の歌よみて其靈驗ありし類なり」となっている。その他に、先に引用した緒言中、「嘉録本」の次に「観応本」が加わっている。「嘉録本」の文字の誤りは後述復興版で初めて正された。

(5) 本書には紙型を用いて合本とした菊判洋装本がある。奥付は和装本第三、第四冊と同一(但し組直し)であるので、それによれば、和装本奥付の欠字部分は各々「十月五日」

「十月十日」と思われる。また、合本の際、頁数を訂正していないため、一 九九（裏白）、一 六六一（裏白）と変則である。

(6) 著者名は本の背文字、扉、内題いずれも「尾上柴舟」、奥付のみ「尾上八郎」となっている。初版の箱は未見であるが、訂正再版では箱の背文字、表ともに「文学博士尾上八郎」とある。

(7) 現在の天理図書館蔵本（九一、一一三、一四九）である。

(8) 山本七羊には『萬葉集』に関して本書と同様の著作があり、鹿持雅澄「萬葉集品物解」に影響を与えたが散逸したという説がある。本書は息章夫がそれを継いだものという（新村出「萬葉集品物研究の一資料」『典籍叢談』大正14刊、岡書院所収）。

(9) 著者名は本の背文字と奥付は「尾上八郎」、本の扉と箱の背文字、貼題簽は「尾上柴舟」（箱一箇所は「文学博士」の肩書あり）となっている。

(10) 『国学者伝記集成』（明治37刊、大日本図書）に「古今集遠鏡霧払」三冊が見えるが、関係は明らかでない。金子は「塵払」を「俗語を以て直訳したるもの」と述べ、さらに

序のみの注は別に挙げているので、歌注も含むらしい。
『国学者伝記集成』に見える書名と併せると、遠鏡を補正するよつな著作が。

「付記」御所蔵の図書の閲覧に便宜を図られた諸機関に謝意を表するものであります。本稿のときは時間をかけてゆっくり作成すべきものであり、今回拙速の謗りを免れません。しかしながら、現在、同様の調査がほとんどなされていないことに鑑み、あえて調査結果を公表したものであります。御教示を俟つものであります。